

課題番号	2	分野名	鳥獣	予算区分	国庫・ 県単
研究課題名	野生動物の効果的捕獲技術の研究				
担当者名	丸山 哲也・矢野 幸広		研究期間	平成 22～28 年度	

目的

シカによる農林業被害や生態系への被害対策として捕獲の促進が急務とされる一方で、担い手である狩猟者の高齢化や減少傾向が進行しているため、労力対効果の高い捕獲技術の実証試験を行い、効率性や課題等を検討する。

方法

調査は、栃木県日光鳥獣保護区内の奥日光地区および足尾地区において行った（図1）。奥日光地区のシカは、積雪期に南部の足尾地区に季節移動をすることが知られている（栃木県 1994）。両地区とも個体数の削減が急務とされていることから、個体数調整として銃による巻き狩りが年に数回行われている（栃木県 2014）。下層植生は両地区とも貧弱で、奥日光地区はシカの不嗜好性植物のシロヨメナが、足尾地区はススキが優占している。

①誘引狙撃法

餌により誘引されたシカを、ブラインドテント（図2）内で待機する射手が発砲する待ち受け型誘引狙撃法を、奥日光地区の2カ所試行した。事前給餌日数について、平成 24 年度は 17 日間（連続給餌は 14 日間）としたが、今年度は短縮を試みて 9 日間（全て連続給餌）とした。誘引餌はヘイキューブを用いるとともに、センサーカメラによるシカ出没状況の監視を行った。捕獲は 11 月中の 6 日間、各日 13 時から 16 時半まで実施した。



図 1. 調査地

②誘引を伴うくくりわな

日光市足尾地区において、森部(2013)が試みた手法を参考に、餌を用いた誘引を伴うくくりわなによる捕獲を試みた。具体的には、獣道の周辺で、岩や立木、間伐材等がありシカの進入方向が限定される箇所に餌をおき、採食時に足をつくると想定される場所にわなを設置した。餌はヘイキューブを、わなは OM30 もしくは OM40（オリモ制作販売）を、捕獲時の止め刺しには電殺器を利用した。平成 26 年 1 月から 2 月にかけての 11 晩設置した。



図 2. ブラインドテント

結果概要

①誘引狙撃法

捕獲実施中に 12 頭のシカが出没し、そのうち 8 頭を捕獲した。捕獲効率（餌付けを含まない）は 1.3 頭/人日（8 頭/6.0 人日）であり、これまで同地区で行われた巻き狩りによる値（0.3 頭/人日；H10(1998)～12(2001)年度の平均、栃木県データ）に比べて 4 倍以上高い値であった。餌付けの開始により、夜間の出没はすぐにみられるが、射撃時間帯に出没するのは 2 週間程度要していたことから、今回は射撃時間帯に誘引できたのが捕獲実施の半ば頃となってしまった。このため、誘引期間は 2 週間以上確保する必要があると考えられた。本手法は少数の射手（最低 1 名）で実施可能であることや、従事者の移動労力が少ないこと、狙撃ポイントが限定されているため安全管理が容易であることが利点として考えられた。

②誘引を伴うくくりわな

16 基のわなを 11 晩設置した結果、19 頭が捕獲された。捕獲効率は 0.108 頭/トラップナイト（19 頭/16×11 トラップナイト）であり、県内の狩猟（H24：0.001 頭/トラップナイト）に比べはるかに高かった。本手法は高い捕獲効率に加え、初心者でも場所を絞りやすいことや、獣道を利用しないことから錯誤捕獲が発生しにくいことが利点と考えられた。一方で、捕獲場所のシカの嗜好性を踏まえつつ、他の動物を誘引しにくい餌を選定する必要があると考えられた。